僕の頭の中のクジラ

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の頭の中のクジラ

【Nコード】

N9245K

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

いつの頃からかははっきりとは分らない。僕は僕の頭の中でマッコウクジラを飼い始めた。

いつの頃からかははっきりとは分らない。僕は僕の頭の中でマッコウクジラを飼い始めた。夜、寝ている間にそのクジラは漆黒の闇が支配する深海千メートルまで潜り、巨大なダイオウイカを何匹も捕食し、その巨大な体躯を維持するために食い尽くす。

僕は目覚めると、そのダイオウイカが胃の中で消化されずに残っていたりする感触を味わうのだ。

しかし、時が経つにつれて、全長二十メートル、体重五十トンのその身体がいとおしく思えてくるから不思議だ。

現実には、その巨体を飼うことなど不可能に違いないけれど、夢の中では、そいつを飼いならし、まるで僕の一部のように扱うことなどなんら不可能なことではない。

それよりもあの青く透明な大海原を自由に泳ぎ回るその姿こそが、この地球ほしの

孤独を象徴しているように思えてならない。

この銀河系と言う宇宙に我々人類は全くの孤独なのかもしれないという思いは日々募るばかりだ。

真空の中の絶対的な孤独を僕は頭の中に飼っている。マッコウクジラという姿を介して僕は僕の孤独に埋没する。

「何考えてるの・・・？」

ユミは相変わらず勃起しない僕のペニスを舐め続けている。

「孤独だよ、絶対零度の孤独・・・」

「あはは、何それ、あなたの売れない小説の題名かなにか？」

「深海に潜ってゆくマッコウクジラの気持ちさ」

「そんな余計なこと考えてるからこいつまでたつてもフニャフニャなんだね」

ユミはそう言うと諦めたように服を着始めた。

「マツコウクジラってさ五年に一度しか出産しないんだってさ」
「あなたと同じじゃない、半年に一度しか勃起しないくせに」

捨て台詞とともにユミは出ていった。確か臨床検査技師養成の専門学校に行ってるって言ってたっけ……。

千メートルの真つ暗な深海で今日も僕の頭の中でマツコウクジラは、食うか食われるかのダイオウイカと生死を賭けた戦いに明け暮れていた。

その巨大な頭部はダイオウイカの反撃に合い、ズタズタに引き裂かれ、幾筋もの深い傷跡に覆われていた。

僕はその孤独な戦いの行く末を、巨大な頭部とは裏腹な余りにも小さな眼球で見続けていた。マツコウクジラの瞳には、この地球ほしの未来永劫の姿がくつきりと刻み込まれていた。

深夜のコンビニのバイトが終わり、八月の生温い風の中を自転車をこぐ。

二十六時の人気のない街で、自分の吐く息だけが追いかけてくる。時折タクシーのヘッドライトが顔面を殴る。眠りたい、どうせ、すぐには寝付けないくせに、頭の中を睡眠への欲求だけが空回りする。結局、いつものように、ポツンとそこだけが僕を手招きしてるように、ガストの灯りの点った駐車場に自転車を置き、自動ドアをくぐる。

薄暗い店内、今日はカップルが多い。やけに静かだ。

音のないスクリーンではマトリックスが場違いの派手なアクションの最中だった。

案内を待たず、いつもの席を目指す。

喫煙者は都会のゴミのように片隅に追いやられる運命だ。

しばらくして、いつもの女の子が僕の席にやってきた。

「ご注文はお済みですか？」

見上げるとかた通りの愛想笑いを無理に作り、僕の返事を待つ。

「コーヒーとそれから・・・」

「・・・それからいつものやつね」

「そう、いつものね」

去ってゆく彼女の後ろ姿は疲れた老婆のように哀しげだ。

同じ日常を、繰り返すのは簡単でしかも安全だ。

大学を出ても就職もせず、ブラブラしている僕に

両親は、とつくに愛想をつかした。

できのいい息子だったはずなのにね、でもね、

平凡な公務員の父とそれに輪をかけた凡人の専業主婦の母親の間
にできた一人息子なんて、

その他大勢の中の一人でしかないんだよ。

僕もついさつきまで錯覚してたけれどね、自分は選ばれた人間であ
って、その他大勢の中の一人なんかじゃないんだって。

大衆と呼ばれるブタには絶対染まらない。迎合なんかするものか・
。。

自分の才能は、必ず何かを僕にもたらしてくれるはずだ。

僕の黄金の心は、何ものにも染まらない。

小説を書いてはあらゆる賞という賞に応募した。

結果は全て落選、僕は中学の現国の先生を恨んだ。

先生、君は他の生徒とはどこが違うねえ、文才あるよ、作文中々
良く書けてる。小説でも書いてみたらどうかな。なんて簡単に煽て
に乗って大学も文学部選んで、学生時代に書いた処女作はどっかの
出版社の新人文学賞に輝き、二作目でとびっきりの純文学書いて芥
川賞、五作目辺りで直木賞なんて青写真描いてたっていうのに、今
はこのザマです。

先が見えた人生ほどつまらないものはない。二十五で僕はすでに屍
だ。

リーマンの悲哀は父の背中です。6畳一間1DKが今の僕の総てだよ、親父。

なんとか生きてるし、これからもなんとか生きてゆくさ。

少なくともこんな時間にここにいる人々の中では、僕も劣等感を抱かず、安堵のため息すら隠す必要などない。

居心地がいい。誰もかれもここでは、平等なのだ。

言葉を交わす必要などない、この今日と明日の狭間で共有する空間だけが真実だ。

みんな無言で繋がっていることを、確認している。

孤独は友人だけれど、独りじゃあまりにも哀しく、虚しい。

一年先も分からない混沌の中で僕らはもがいている。周りには何もかもが横たわっているけれど、欲しいものは決して手にいれることはできない。

転がっているのは、効かない薬ばかり。お座なりの愛もここでは真実だ。

誰も本物など求めていない。朝を迎えるまでの数時間、それだけでいい。

ここにいて全ての人の安息の地、そして約束の場所……。

「あと三十分でバイト終わりなの、寄ってく？」

「ああ……」

「自販機でコンドーム買って行ってね、買い置きもつないから」

「ああ……」

なんて名前だっけ……ガストの子の名前、何度も寝てるってのに……そう、ユミだ。

初めて誘った時、彼女はこう言った。

「あたしとしたら、忘れられないわよ、気持ちいいんだってあたし
のあれって数の子なんかかって言うらしいよ」

んですね。

知りませんでした(汗) とりあえず原文のまま上げときます。しゅめんなさい。

ナツキ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245k/>

僕の頭の中のクジラ

2010年10月19日21時50分発行